

girl ハムレット

原作／シェークスピア
森 三千代

style





シェークスピア原作

ハムレット



森 三 千 代

N. D. C. 908

偕成社 1979 年

304p. 19cm.



著者の了
解により
検印廃止

ハムレット (図書館版2)

一九七九年二月 三刷

定価 七〇〇円

著者 森 三千代

発行者 今 村 広

印刷所 若葉印刷有限公司
東京都文京区後楽二の一八

発行所

株式会社

偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三の五

振替 東京 五一 一三五二番

若干本・若干本はおとりかまいたします。

printed in Japan.

© 1965年

この物語について

世界でいちばんえらい文学者はだれか、と問われたとき、それはシェークスピアだと答える人がたくさんいるでしょう。シェークスピアは、それほど偉大な文学者です。

「ハムレット」は、そのシェークスピアのたくさん書いた作品のなかでも、傑作中の傑作のひとつです。

ウィリアム・シェークスピアは一五六四年四月二十三日、イギリスのスニッターフィールドというかたいなかで生まれました。おとうさんは、毛織物にする羊の毛を売る商人でしたが、ウィリアムが十三才のとき、事業に失敗して、ウィリアムは学校を退学しなければなりません。若いときに、イギリスの首府ロンドンに出てきました。そして、芝居の木戸番のような一番下の仕事からはじめて、コッコツと修業をし、芝居の脚本を書いたり、詩をつくったりするかわら、じぶんでも舞台上に立って俳優となって、だんだん世間からもみとめられるようになります。

一五九九年、彼が三十五才のとき、グローブ劇場（地球座）という劇場をつくり、そこでじぶんの書いた脚本で芝居をして、みんなの賞賛をえました。

お金もたくさんはいるようになり、おとろえたわが家を再興することができました。そればかりでなく、有名なエリザベス女王の御前で芝居をごろんにいれる名誉をにない、一六〇三年ジェームス一世のご即位のときには、この地球座が、帝室劇場にえらばれました。

かずかずの名誉をえて、成功をかさねたシェークスピアは、その後引退して故郷へ帰り、一六一六年、ふしぎなことに生まれた日とおなじ日に、五十二才でなくなりました。

生涯のうちに書いた脚本は三十六編で、そのほか、三冊の詩集があります。

脚本は、喜劇も悲劇も歴史劇もあります。そのうちでも傑作といわれているのは『ハムレット』『リア王』『オセロ』『マクベス』の四大悲劇ですが、その他に『アントニオとクレオパトラ』とか、『真夏の夜の夢』『ベニスの商人』などが知られています。

『ハムレット』はなかでも有名な作です。デンマークの昔の物語で、ハムレットという王子が父の敵である叔父クロジアスを討って、じぶんも毒の剣で死ぬという悲しい物語です。

ハムレットは英雄豪傑ではなく、私たちとおなじ、普通の平凡な若者で、なやんだり悲しんだ

り、人間らしい人間がえがかれているところに、この作品がいつまでたっても人に感銘をあたえるあたらしさがあるのです。

そしてシェークスピアが他の文学者たちよりすぐれて、いつまでたっても名声がさがらないのはそのためでしょう。ひと口に、憂うつで、悲観的な青年のことを、ハムレット型の青年だというくらい、その名は一般的になっています。

しかし、脚本では読みにくいし、芝居にするのでなければ興味もうすいので、私はこの話を読みなさんがおもしろく読めるように、ところどころかえたり、おぎなったりして、書きあらためました。どうか、そのつもりでお読みください。

森
三
千
代



こ、	廊 ^{ろう} 下 ^か	発 ^{はつ}	門 ^{かど}	父 ^{ちち}	嘆 ^{なげ}	深 ^{ふか}	
う、	の		出 ^で	と	き	夜 ^よ	目 ^め
も、	め		の		の	の	
り、	ぐ				王 ^{おう}	亡 ^ぼ	
り、	り	狂 ^{きやう}	宴 ^{えん}	子 ^こ	子 ^じ	靈 ^{れい}	次 ^じ
.....							
二 三	二 九	七	二	五	三	一	





新狂言「ねずみとり」……………	二六
海賊船……………	二五
花のじゅうたん……………	二七
剣と毒杯……………	二七
王子の帰国……………	二六
墓地……………	二五
御前試合……………	二六

(目次おわり)



この物語の主なる人々



〔ハムレット〕

「王子ハムレット」

デンマーク国の王子。温厚な性質なので国民には人望あついが、父王の死にうたがいをもち、叔父クロージアスの即位に不満をいだいて、そのためになやみぬく。きちがいをやそおい、事の真相をつかむが、決断に苦しみ、みずから悲劇を生む。

「クロージアス王」
先王ハムレットの弟。ひそかに奸計をめぐらし、兄王を毒殺して王位をうばう。連日酒宴をひらいては享楽にふけり、重税を課しては国民をくるしめる。王子ハムレットの復讐をおそれ、逆に殺害せんとするが、ハムレットの剣にかかって死ぬ。



〔クロージアス〕



（ポローニウス）

「大臣ポローニウス」
白髯の老人で、知恵もあり根は正直者でありながら、暴王クロードニアスにつかえて、その悪計をそそのかしたため、王子ハムレットのうらみをかい、無残な最期をとげる。

「オフェリヤ姫」
大臣ポローニアスのひとり娘。身も心も花のように美しく、父の無情な権力をにくみ、最後まで王子ハムレットを尊敬し信じて、永遠に帰らぬ花と散る。



（オフェリヤ）



（ホレイショ）

「ホレイショ」
ハムレットの親友。忠節の心があつく、つねに現王の陰謀を看破しては王子の身辺を守り、その悪政を憂いては、エルシノア王城の内外を縦横に活躍する。

表 装
口 絵・紙
絵・さし
絵 丁

土 岡

村 本

正 筧

寿 爾

ハムレット

森 三千代



深夜の亡霊

「城のものの見櫓のうえに、このごろ毎晩亡霊が出るんだよ。」

そんなうわさが、ばつとたちました。

もの見櫓というのは、城の塀や、屋根よりもたかいところで、敵がおしよせて来るのを、歩哨の兵士がみはつているところなのです。

「ほんとうかい。それは？」

「うそだとおもうなら、昨夜、もの見櫓に歩哨に立った兵士にきいてみるがいい。その兵士は、あまりのおそろしさに、がたがたふるえがとまらなくなって、いまでも、頭のうえまで毛布をかぶって寝ているそうだ。」

ひとりの耳からべつの人の耳へと、ささやかれてゆきました。

そうになると、ふだんにはつよそうな顔していばっている士官たちでも、なんとなくす気味わるくなつてきて、歩哨の順番がまわってくると、おなかが痛いとか、頭痛がするとかいって、み

んな逃げるさんだんをするのでした。

「たとえば、どんな強いやつでも、相手が人間ならびくともしないおれさまだが、どうも亡霊というやつは煙のようで、切っても突いても手ごたえがないだろ。僕は、うまれつき亡霊は虫がすかないのでね。」

そんなくるしい、いいわけをするものもありました。

時代は、いまから一千年以上もむかしの話です。

ところは、北海おろしのつめたい風が、ごうごうと悲鳴をあげて吹きつけるデンマークの国、荒海にそうたエルシノアの城でおこったできごとでした。

もの見櫓は、城のそとの、ごつごつした岩のうえに、海へつきだすように立った高台のいちばんてっぺんにありました。この櫓には、夜、昼、かわりばんこに歩哨兵が立って、たえず海のほうを警戒しているのです。

そのころのヨーロッパといったら、イギリスでも、フランスでも、ドイツでも、戦国時代とおなじことで、どこの国も、おたがいに油断をみすまし、となりどうしが攻めあって、じぶんの国の領地をすこしでもふやそうとねらっていたのです。

そんなわけで、海のほうからだって、いつなんどき、敵の軍船が、兵士をのせて攻めよせて来ないともかぎりませんでした。そのほかに、北海にはつよい海賊団がいて、荒らしにくる心配もあったのでした。そんなわけで、一刻一秒でも、海のほうから目をはなしたら、どんなことになるかわからないというふっそうさでした。

いくら亡霊がこわいからといって、歩哨をいいかげんにしておくわけにはゆきません。今夜もどきようのある、力じまんの兵士のひとり、もの見櫓の上に立って、くらい海のほうをじっとみつめていました。

闇の底に、波の白泡だけが、魔ものが牙をむいてよせてくるように見えます。からだごとどこかへさらわれてゆきそうな強い風が、ひゅう、ひゃつと悲鳴をあげて、耳もとをかすめてゆきます。

「おお、寒い。これはたまらないわい。」

と、兵士がおもわず身ぶるいをしますと、からだにつけていた鎧の金具が、かたかたと鳴りました。

すると、亡霊のうわさ話が、急に気になりました。おくびょう風とでもいうのでしょうか。

か。さすがのときようじまんの兵士も、からだのふるえがとまらなくなりました。

「はやく、かわりの兵士が来てくれないかなあ。もうそろそろ時間がくるというのに、いったいかわりのやつはどうしたんだらうなあ。」

ひとりごとをいいながら、しまいには、泣きだしそうな顔つきになりました。

そろそろ、午前零時が近づいてきました。零時といえ、まよなかです。

雲の足はとぶように早く、波も、風もだんだん、はげしくなつてゆくようです。

「こんな風波のつよい晩に、いくら敵でも攻めては来ないだろう。第一、船が来たつて岸によりつけたものじゃない。岩におつかつて、こなごなにこわれてしまうのがおちだ。さあ、ひとつ、このへんで、こちらから、かわりの兵士殿をおでむかえにゆくでしょうか。」

ひとりごとをつぶやきながら歩哨の兵士はながい槍を肩にかついで、櫓をおり、高台のせまい石の階段を、こつり、こつりとおりはじめました。

「だれだ？」

兵士がおりてゆく階段の下のほうから、するどい声が呼びかけました。

兵士は、とっさに肩にしていた槍をとりなおし、近よらば上から突きおろそうと身がまえをし

ながら、

「だれだとは、こっちでいうことだ！ 止まれ。そして名を名のれ。」

と、逆にとがめかえました。

「デンマーク国王ばんさい。」

さっそく、下からこたえました。

・デンマーク国王ばんさい・というのが、彼らどうしのあいことばでした。あいことばで答えることのできないものはあやしいものとみて、槍で突かれてもしかたがないきそくになっているのです。

「やっ。その声は、たしかに少尉殿。」

「そうだ、少尉だ。歩哨だね。ごくろうさんだな。」

少尉がすぐそばまであがってくるのを、兵士は直立の姿勢で待っています。

「かわったことはなにもなかったか。」

「は、なにごとかわったことはございません。……そろそろ歩哨のいれかわりの時間なので、おりてきたところです。」